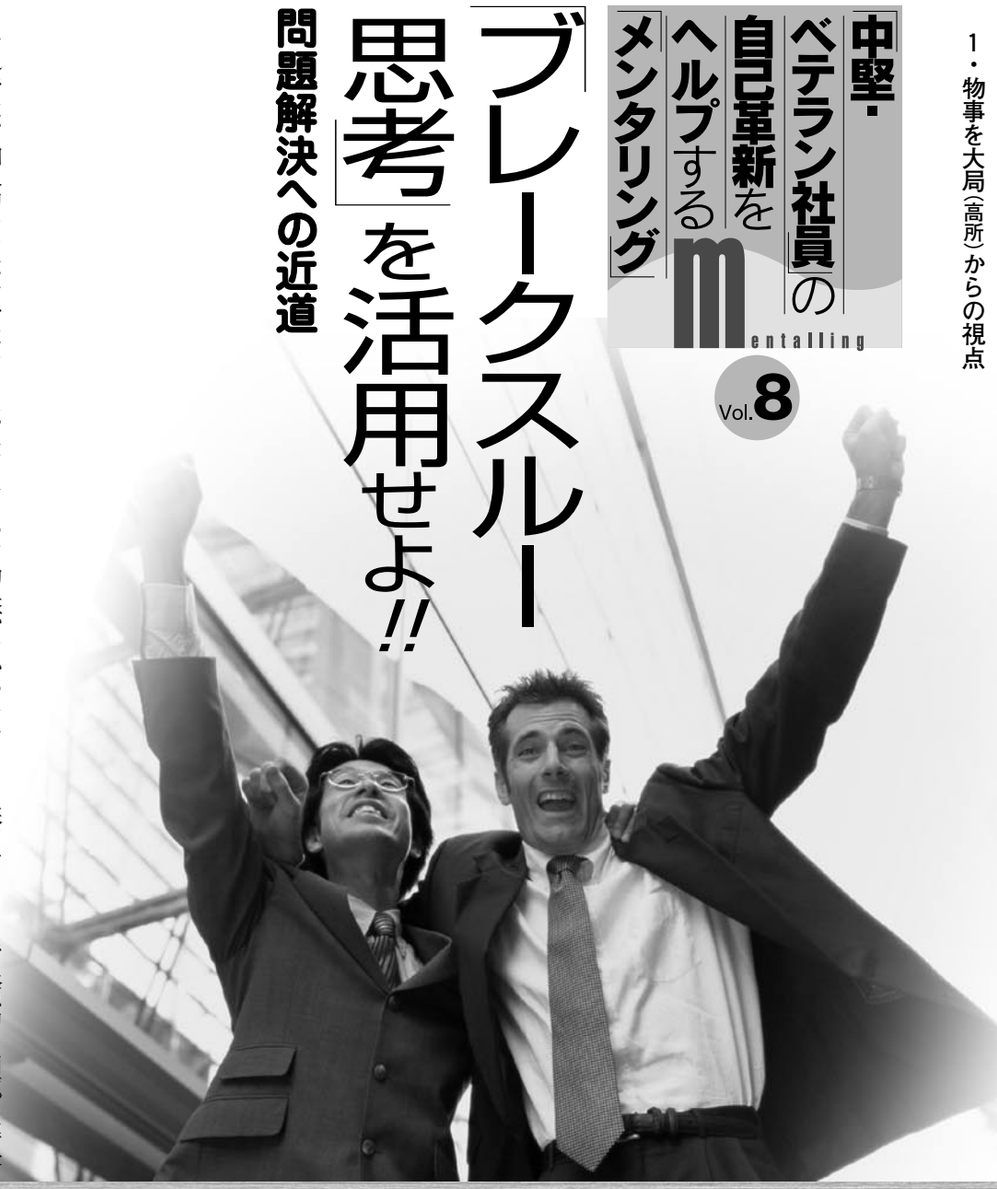
「中堅・ベテラン社員」の自己革新をヘルプする「メンタリング」

Vol.8

「ブレークスルー思考」を活用せよ!!

問題解決への近道



皆さんは、〝ブレークスルー思考〟という言葉を聞いたことがありますか?

新しい思考法で、特に、**問題解決などの際に大きな効果を上げており、さまざまな分野で注目され、また、導入されています。**

この思考法を開発したのは、中京大学の日比野省三教授と米国のジェラルド・ナドラー博士です。実は、この思考法は、私が7月号と8月号でご紹介しました〝ミッションとバリュー〟と〝プラス思考〟とも**非常に深い関係があります。**

9月号では、この〝ブレークスルー思考〟について解説し、中堅・ベテラン社員の方々にとって、とても重要なツールの一つになることを検証していきたいと思います。

ブレークスルー思考とは何か

世の中には、それまでは全く考えられなかった内容やアイデアで、市場を大きく変えるような新商品が生まれたり、深刻な問題が劇的に解決されたりすることがあります。

そのほとんどが、このブレークスルー思考から生まれてきたもので、今、世界中で注目されているハイブリッドカーなどもその一つです。

ブレークスルー思考を簡単にまとめると、次の三点に要約することができます。

1・物事を大局(高所)からの視点で考える。

2・常に目的(根源的)を明確にし、そこに近づこうとする。

3・あるべき姿を明確にし、その姿を起点に物事を考える。

この三点は、どれをとっても当たり前のように思えますが、実践するとなるとそれほど簡単なことではありません。もっと正確に表現すると、この思考法を十分理解し、意識してパラダイム(思考の枠組)を変えない限り、本当の意味でこの三つのことを実践することは難しいでしょう。

では、**なぜ、その実践が難しいのでしょうか。**

それは、私たちがあるパラダイム(思考の枠組)によって強く縛られているからなのです。

それは、近代という時代に生まれ、近代科学を基礎とした近代教育を受けた、つまり私たち日本人を含めた**先進国のほとんどの人々が『近代合理主義』(デカルト思考)によって、ものの見方・とらえ方を既定されている**からなのです。

つまり、今まで私たちが親しんできた思考法は、物事を要素に還元して(部分に分解して)、分析的に考えていく〝デカルト思考〟と呼ばれるものなのです。なお、**デカルト思考は、**

1・すべての問題は、要素に分解できる。

2・それぞれの要素は他のものと置き換えることが可能である。

3・分解した要素を再結合すると全体になる。

4・各要素問題を解決すれば、問題全体を解決できる。

このような特徴を持っています。

思考法でこんなに結果が変わる!

それでは、抽象的なレベルではなく、具体的な〝ブレークスルー思考〟例をご紹介します。

これは実際にあった**ある電力会社の問題解決への取り組みです。**

問題

送電線にカラスがハンガーを持ってきて巣をつくる。それは、たいへん危険な状況である。また、それを除去するコストが膨大である。

この問題について、電力会社は、**まず、鳥の専門家を集め**(鳥害研究所までつくったそうです)、**問題を分析させ**(特にカラスの習性を分析し)、**さまざまな解決策を試したそうです。**

例えば、カラスの嫌がる風船を作ったり、カラスの嫌がる超音波を出す装置を開発したり…と、三年間にわたって膨大なコストをかけ、その取り組みが行われました。

しかし、カラスの適応能力はとても高く、どの策もすぐにカラスが適応してしまって効果がなかったそうです。

最終的に電力会社は、ブレークスルー思考を導入し、あっけなくこの問題を解決してしまいました。

その内容は、**鉄塔に人工のカラスの巣をつくり、カラスにそれを提供するという単純なもの**でした。これによって、カラスはハンガーを電線に絡めて巣をつくる必要がなくなったわけです。

問題そのものを起点とし、分析を始めた専門家たちは、カラスを除去することばかり考えていたことになります。

それに反して、**目的を起点にして考えたブレークスルー思考の解決者は、**カラスと共存するという方法を採用することで根源的な問題を解決することができたのです。

現場で活かせるブレークスルー思考

会社において、常に目的を考えながら問題解決にあたる。つまりそれは、ミッションを常に行動の拠り所にするということなのです。

反対に、問題そのものに捉われていると、本当の問題解決はできません。そして、そのミッションが理想の姿である限り、プラス思考でしか考えられないということになります。

ぜひ、皆さんにもこのブレークスルー思考を現場で実践していただきたいと思います。

日本の大学で教育学を専攻した後、渡米。州立オレゴン大学大学院卒業後、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド等さまざまな国の教育機関や教育プログラム実践者を訪問し、グローバルエデュケーションモデルを模索。東洋思想、インド思想などとの出会いから東洋と西洋を融合するホリスティック教育を目指し、広範囲の教育ツールを研究。2002年に国際メンターシップ協会を発足させ、『メンタリング』の普及と研究に力を注いでいる。活動としては、『現場中心主義』をモットーとし、学校教育と企業の人材教育の両分野で価値のブレークスルーを通じてモチベーションを高める独自の手法を用い、研修、講演などを行なっている。コンサルティング分野では、ミッションマネジメント、メンタリングシステム導入、コーチングセールス導入、企業の企画/戦略の作成、商品企画、などを手がける。また、米国のIMA(国際メンタリングアソシエーション)やISPI(国際パフォーマンス改善協会)の正会員として人材育成の分野において国際的な活動も続けている。

統合共育研究所所長
国際メンターシップ協会理事
国際メンターシップ
グラジュエートスクール副学長
大野 雅之
Masayuki Ohno